



2007年7月に三田市の新しい芸術文化活動の拠点としてオープン。大・小ホールをはじめ、リハーサル室、練習室、会議室、展示室などがある。指定管理者として株式会社ジェイコム(ジェイコム・グループ)が管理運営を行い、音楽、演劇、市民参加型の企画など、様々な自主事業を実施している。

「ボランティアとの関係」
ボランティアのスタッフは？
現在は、ホールボランティア組織はないんです。これまででは、事業のプロジェクトごとにボランティアを募集しています。
大型の自主事業では、会場案内などの業務も、業者へ委託しています。

ボランティアとの関わりは？
ボランティアとの区別の難しさやサービスピールの確保もありますが、いろんな意見を持った人たちが入ってこられると難しい場面も出てくるので、入場無料の催しものと違って自主事業の場合、お金を払って見に来られたお客様に失礼があつてはいけません。チケットの客席案内にしても、お客様にとってはボランティアが専門職員の違いはなく、開館当初はサービスピール確保を優先しました。今後はボランティアの組織化を進めたいと考えています。

市民活動との関わりは？
「ミュージックコレクション」や、「夏ざくら」「ハモラッセ」等の自主事業公演を通じて市民や文化団体との協働を積極的に推進したいと考えています。また、地域との接触を図るために文化団体や文化協会に何度も足を運び、顔を覚えてもらいました。

市民の反応は？
一般市民のみなさんとは、貸館などの施設運営や自主事業や広報活動を通じて関わりをすすめています。反応は・・・事業を通じて少しずつ、認知と理解、共感を得ているとは思いますが・・・
これから、施設の管理や運営については、業務を差別してボランティアとの協働を図っていきたくないと考えています。市民による参画が有効で発展性の

小野市には市民会館とうるおい交流館エクラという2つの、ホールをもつ文化施設があります。前者は市が管理し、後者は指定管理者制度によって、NPO法人北播磨市民活動支援センターに管理運営が任せられました。

今回、インタビューにお伺いした三田市総合文化センター「郷の音ホール」は、サービス産業のプロであるJT Bグループの総合企画会社「株式会社ジェイコム(ジェイコム・グループ)」がその指定管理者を受けています。

館長の後藤さんは松竹芸能株式会社に長くおられ、ミヤコ蝶々さんの会社に入社されたキャリアの持ち主。その確かな運営のノウハウをお訊きました。



三田市総合文化センター 郷の音ホール 館長 後藤 新一さん

シリーズ
listen to....

聞く Vol.12

地方のホール、そのあり方

「指定管理者に課せられた地域文化の向上」

ごとう しんいち
後藤 新一さん

運営はどのように？

運営チームを館長の私と、総務、施設、事業担当の社員5名とパート4名で構成して、そのすべてが株式会社ジェイコムの社員です。三田市からの出向はありません。設備管理は日本管財(株)が担当し、清掃は大林フアシリテイ(株)が担当し、舞台は神戸国際ステージサービス(株)に、委託しています。

年間の自主事業は？

大小ホールと展示室を含めて、年に45から50事業の自主事業を展開しております。前年の秋にクラシックが何事業、古典芸能が何事業、ポップや演劇が何事業などの計画を提出します。

その企画は？

基本的にはジェイコム本社内のプロジェクトチームが主導し進めます。同時に郷の音ホールは、プロデューサーシステムがあり、音楽関係のプロデューサーと演劇関係のプロデューサーの2名が配置されています。一人は東京、一人は常駐です。

集客方法は？

郷の音ホール友の会「Satonet」には、2,500人の会員登録があります。電話で1人4枚まで先行予約できるのでありますが、それだけで完売してしまうこともあります。他にも、友の会の特典として、地元ホテルのレストランでの飲食が割引になるとか、会員ポイントがたまるなど指定公演のチケットが割引で買えるようなメリットも用意しています。会員には、年6回発行しているホールの情報誌「Satonet」を郵送し、イベント情報を提供しています。

経営状態は？

市の指定管理料と、施設利用料や駐車場の利用料、チケットの売上げ等が収入源です。今まで民間に利益を得ることを考えてやってきましたが、指定管理者である私たちに課せられているのは、「芸術文化活動のための施設の提供」であり、「その情報の収集と提供」及び「その奨励と育成」。いわゆる地域文化の振興です。

ある業務については今後、積極的に市民との協働をすすめたいと思います。

「NPOと企業の協働」

今後の課題は？

やはり我々企業は、専門分野のノウハウは得意であっても、市民を巻き込んだり、ボランティアとの連携のとおり方はNPOの方が優れていると思います。いずれも、その組織がもっている特性や持ち味などが其々にあると思えます。今後は「企業」と市民や地域を中心に据えた組織である「NPO」との協働による事業や施設の運営がますます必要になってくると思います。

プロフィール

後藤 新一 (ごとうしんいち)

昭和17年 大阪に生まれる
昭和40年 松竹芸能(株)入社、演劇・テレビ関係に携わった後、昭和57年日向企画(株)に入社。ミヤコ蝶々全般のマネージメントを担当。
平成13年新神戸オリエンタル劇場支配人を経て、平成18年郷の音ホール館長として就任した。

郷の音ホールとエクラホール、それぞれのホールを見てみよう！



三田市総合文化センター 郷の音ホール	項目	小野市うるおい交流館
2007年7月	オープン	2005年3月
ジェイコム・グループ	指定管理者	NPO法人 北播磨市民活動支援センター
114,089人	所在地(市)の人口 ※9月末現在	50,435人
10,300㎡	床面積	5,683㎡
大ホール 974席 小ホール 358席	客席数	502席
約50本	自主事業の数 ※2007年度	約60本 (公募型事業を含む)
<ul style="list-style-type: none"> 事業を通じて取り組んでいる。(公開レクチャーや音楽ワークショップなど) ボランティアは、そのつど募集するので組織化されたものはない。 今後は、それぞれの特性を活かした協働を進めていく。 	市民活動との かわり	<ul style="list-style-type: none"> 実行委員会が主体となって事業の企画運営をしている。(約400名が参加) フロントや影アナ、ホールの裏方スタッフなどでも、ボランティアが活動している。 市民参画型事業や、展示ギャラリー及びステージの開放事業を実施。